

2.4 歴代委員へのインタビュー集

歴代委員に以下の質問についてインタビューを行いました。

- ①研究テーマ
- ②委員会での担当役職
- ③活動を振り返って

1. 倉員 宏明（修士課程修了、インフォコム株式会社）

①日本近代文学を専門とし、修士論文では堀辰雄の最初期における詩と小説の関係を扱いました。

②院生専門調査

③院生専門調査と展覧会調査の仕事を中心に関わらせていただきました。作業自体は決して華やかなものではありませんが、エクセル表での作業や、美術館への電話での問い合わせなどは、就職後の仕事の良い練習にもなったと思います。また美術系のことに疎かった私には、様々な新しい知識を得る機会ともなりました。

2. 藤田 千紘（修士課程修了、国立国会図書館）

①近代日本における本の装丁と、装丁についての言説をテーマにしていました。修士論文では、昭和初期の装丁論を「工芸」という観点に注目しつつ検討しました。

②ブログ活用担当

③委員会での調査によって全国の展覧会状況を知ることができ、関心ある展覧会の発見が容易になっただけでなく、いま日本でどのような展覧会が開かれているかを一望できた点が非常に有益でした。また、委員会ブログの活性化を担当し、利用者増加のための企画の実現に携わったことも良い経験になりました。

3. 川辺 和将（修士課程修了、毎日新聞社）

①クロード・モネの市場戦略

②副委員長

③幅広い人脈を築くことのできるところが、カタログ委員会の魅力のひとつです。ゼミや分野の垣根を越えて、普段関わることのできないたくさんの方と知り合いになる機会がありました。友達を増やしたり、イベントを企画したり、お酒を通じて先輩方と仲良くなったりといったことで、様々な方面の知識を身につけることができました。

4. 定村 来人（博士課程）

①幕末明治期に活動した絵師、河鍋曉斎を中心に、19世紀後半の日本美術を研究しています。

②委員長

③私が委員長を務めさせていただいた年は、駒場博物館の図書館をより利用しやすくすることがプロジェクトの一つとしてありました。美術を研究する者にとっては、駒場博物館の図書館は貴重な資料の宝庫です。スタッフの方々との話し合いを通して、利用者としての立場と運営側の立場の両方から、図書館のあり方を考える経験ができたことが貴重でした。また、気さくな駒場博物館のスタッフの方々と、今でも続く良い関係を築くことができたのも大変良かったです。カタログ委員会を通して、違うゼミの人たちとのつながりをつくることも魅力です。分野の違いを超えた研究を目指す比較研究室の方針を体現した、刺激的な場がそこにはあります。

5. 岩瀬 慧（博士課程）

①カバネルの作品論、及びアカデミスム絵画研究

②見学会企画

③展覧会調査は慣れない作業でしたが、やってみると良い経験になりました。訪れたことのない美術館についての知識を得て、巡回展情報をうまく探せるようになりました。世田谷美術館の見学会を企画した際は、学芸員の方から貴重なお話を伺いました。帰りに用賀駅ちかくのジョナサンに立ち寄り、デザートを頂きながら委員のみなさまと楽しい時間を過ごしたのも良い思い出です。

6. 堀江 秀史（博士課程）

①寺山修司、クロスジャンル論（文学と写真、映画）

②2011-12 年度委員長、その他

③2007 年度以降、現在まで委員会に所属しております。最初は何をやっているのかすら分からないところからスタートしましたが、そこから数年を経て、振り返れば非常に大きなものを得ていたことに気づきます。自分にとって近いようで実はとても遠い「美術」の分野に、「展覧会」を糸口として曲がりなりにも関わりを持ち続けられたこと、それを論じても良いと感じられること、そして、ゼミ横断の院生同士の交流が出来たこと、これらは、当初は気づきませんでした。後々になって非常に得難い経験であり実感であると感じました。今後の発展に何が必要か考え実行することが、この御恩返しになるかなと、今は考えています。

7. 任 ダハム（博士課程）

①植民地期の日韓映画における都市「京城」（現ソウル）表象、植民地期の日韓映画交流

②今年度には、留学生相談役を担当させていただきました。

③はじめて展覧会調査に参加した時のことがまだ記憶に新しいですが、あれからすでに6年が経ってました。委員会の構成員は毎年変わりましたが、各期委員長の方々をはじめとした委員の皆さんの熱意と誠実さには、いつも刺激をいただいております。そして、皆さんの努力によって出来上がった展覧会調査一覧表を見る時が、私にとっては、最も委員としてのやりがいを感じる瞬間でした。今年で10周年を迎えるカタログ委員会の「歴史」を、半分以上共有できたことを、とても嬉しく思います。

8. 信岡 朝子（東洋大学）

①日米動物表象の比較研究（19世紀～20世紀）、環境表象としての写真、医療と文学の関わり（闘病記文学を中心に）

②第1期委員長、及びその後の委員会での展覧会調査

③最初の立ち上げの時から関わらせていただきましたが、当初は美術や展覧会のことなどまったく分からず、美術史に詳しい他の院生の方々に頼りまくって、何とかまわしていたように思います。委員の皆さんと、どのご専門の方にどの展覧会の評を書いてもらうかを話し合う中で、新しい発見や思いもかけない組み合わせなどが出てくるのは、創造的で楽しい作業でした。この委員会を通じて、展覧会カタログやポスター、チラシに至るまで、美術展というものを総合的なプロジェクトとして見る視点を養っていただいたと思います。

9. 林 久美子（博士課程）

①世紀転換期（1890～1920 年代）の日仏文化交渉史

②委員長、副委員長、ブログ・ML 管理

③院生委員会初期の頃から参加させていただき、年々、活動が組織立って、着実に成果をあげていく様子を、古くからのメンバーの一人として、大変嬉しく感じておりました。委員会の行事では、駒場博物館資料室の開室式や、国立新美術館図書室の見学会などが、深く印象に残っています。美術館や展覧会についての情報を得られることはもちろん、私にとって委員会活動は、ゼミや学年の異なる院生の方々と交流できる貴重な機会でもありました。

10. 韓程善

①文学と映画の比較芸術、江戸川乱歩

②文学館プロジェクト

③もう 6 年前になりますね。2007 年度の文学館プロジェクトは、日本全国の文学館リストから、どこの文学館の企画が充実しているかを把握する作業でした。みんなで全国の文学館を分けて調査し、担当した地域の文学館の特徴など調査した感想を話し合いました。特に留学生であった私にとって日本の文学館を把握する作業は、非常に貴重な経験でした。文学館プロジェクトは、私の留学時代の忘れられない思い出の一ページです。

11. 小泉 順也（一橋大学 准教授）

①ポスト印象派を中心としたフランス近代美術史

②普通の委員＋駒場博物館担当

③展覧会調査や資料室に収められた展覧会カタログを通して、自分の知らない博物館や美術館が日本にはたくさんあり、そこで多彩な活動が繰り広げられていることを実感できたように思います。頭の片隅に館名が残っていれば、近くを訪れたときに、どうしても気になって立ち寄ってしまいます。そうした切っ掛けを与えてもらいました。

12. 佐々木 悠介（駿河台大学ほか 非常勤）

①カルティエ＝ブレッソンと二十世紀の写真言説（フランス語圏と英語圏）

②2005 後期-2006 前期：委員長

③まだ委員会を立ち上げて間もなかったもので、マニュアル化されていない部分も多々ありました。比較芸術の理念からも、美術系以外の院生の方にも多く参加して頂きたいということで、できるだけ委員会の作業が繁雑にならないようにということを意識していたような気がします。2006 年夏の引継ぎ会では、それまでの院生評執筆者をお呼びして合評会を企画しました。懇親会は神泉の七輪焼きのお店で企画したのですが、換気の調子が悪くて煙濛々、皆さんに申し訳なく思ったことを覚えています。そのお店はもうなくなりました……。

13. 井口 俊（博士課程）

①19世紀フランス絵画史、特にエドゥアール・マネと第二帝政期の美術批評

②委員（2008-09）、委員長（2010-11）

③展覧会カタログは私の専門である美術史を学ぶ上での必須文献ですが、委員会に所属するまではその構成や形式、装丁などの面に特段気を配ることもなく、ただ収録内容にばかり注意を向けていました。委員会の活動を通じ、「展覧会カタログ」というジャンルのもつ豊かさに目を開かされたことが、一個人としてはもっとも大きな収穫です。また、委員長を務めさせていただいた年度には震災があり、例年とは異なる形での展覧会調査を行いました。委員のみなさまのご協力により完成した資料は将来貴重な証言となることと思います。

14. 安藤 智子（國學院大学、清泉女子大学、法政大学非常勤講師）

①アルフォンス・ルグロ 英仏美術交流史

②委員長

③先輩の陳岡さんが担当なさった国立西洋美術館でのコロー展を今橋先生と皆さんと見学に行ったことが印象に残っています。その日は夏の大変暑い日で、見学会後に銀座のビアホール行き、今橋先生とコローの描く女性の二の腕が妙に生々しいと語り合わせていただいたことが記憶に残っております。全く頼りない委員長の私を支えていただきありがとうございました。カタログ評院生委員会でのゼミの枠を越えての皆さんとのおつき合いが、現在に至るまで私の研究の糧となっています。

15. 伊藤 由紀（博士課程）

①日本におけるオペラ受容

②展覧会調査、ブログ活性化、副委員長

③それまで展覧会は「目に付いたら見に行く」程度の関心だったのですが、委員会で展覧会調査に参加したことをきっかけに、自分の研究に関係のありそうな展覧会を自分から探して見に行く習慣ができました。また、2年間かけた調査票のフォーマット変更では、「ちょっとアイデアを投げてみたら、一緒に考えてくれる人や専門的なスキルのある人が集まってきて、予想もしなかったほど良いものが完成する」という共同作業のダイナミズムを味わいました。その後、他の共同研究プロジェクトで複数人でのデータベース入力に参加したときも、ここで得たノウハウが役に立ちました。

16. 永井 久美子（比較文学研究室助教）

①絵巻物、後白河院文化圏

②副委員長、相談係

③いろいろありましたが、「東京—ベルリン／ベルリン—東京」展（東京会場：森美術館、ドイツ会場：ベルリン国立美術館、2006年）が、今でも印象に残っています。『比較文学研究』第88号へのカタログ評掲載を推薦することになった展覧会であったほか、この展覧会をきっかけに、駒場博物館の収集方針のひとつ（海外の図録のうち、日本巡回展のあるものを積極的に集め、日本版との内容を比較すること）を提案させて頂き、それを承認してもらえたことは、とても光栄でした。駒場博物館の蔵書の拡充をみるにつけ、初期メンバーとして委員会に関われたこと、立ち上げ期からの活動が継続されていることを、嬉しく思っています。

2.5 歴代院生委員名簿 (2004-2013 年度)

区分	名前	専門	所属
1.美博資料室歴代担当 T A	陳岡めぐみ	近代フランス美術	国立西洋美術館 主任研究員
	杉山菜穂子		三菱一号館美術館 学芸員
	松尾薫	クロス・ジャンル研究（視覚芸術）、 ポール・セザンヌ、風景画	乃村工芸社

2.院生委員会歴代委員	安藤智子	アルフォンス・ルグロ	國學院大学、清泉女子大学、法政大学 非常勤講師
	井口俊	エドゥアール・マネ、19世紀フランスの美術批評・カリカチュア	比較・博士
	伊藤由紀	明治・大正期の文学者のオペラ受容、翻訳定型詩	比較・博士
	李賢峻	日本の昭和文芸、崔承喜（チェ・スンヒ）	小樽商科大学 准教授
	任ダハム	日本近代文学、映画、植民地期の日韓メディア	比較・博士
	岩瀬慧	アレクサンドル・カバネル、19世紀フランスのアカデミズム絵画	比較・博士
	王詩芬	雑誌研究、台湾の女性誌	比較・修士
	太田直樹	日本近代文学、比較文学、岩野泡鳴、小栗風葉	比較・修士
	小野瀬宗一郎	比較文学、ポストコロニアル研究、Oscar Wilde, Seamus Deane, Frantz Fanon	
	加来杏沙子	近代日本美術、比較芸術、牧野義雄、日英博覧会	比較・修士
	川澄亜岐子	比較文学比較文化、ラフカディオ・ハーン	比較・博士
	川野恵子	ディアギレフ・バレエ団、ヴァスラフ・ニジンスキー	
	川辺和将	比較芸術、美術史、ドーミエ、ドン・キホーテ	毎日新聞社
	神林尚子	幕末・明治初期における江戸戯作、仮名垣魯文の草双紙（合巻）	比較・博士
	韓冰	創作版画運動、印刷文化、複製芸術	文美学・研究生
	金志映	比較文学・比較文化、戦後日本文学におけるアメリカ表象	比較・博士
	金暎美	日・韓の国語教科書の比較（翻訳文学と紀行文を中心に）	
	金ヒョンギョン	言語学、日本文学、大江健三郎の初期作品、narratology	
	倉員宏明	日本近代文学、比較文学、堀辰雄、神西清	インフォコム株式会社
	小泉順也	19世紀フランス美術史、日仏美術交流史	一橋大学 准教授
	小坂井玲	美術史、比較芸術、ジャポニスム	山梨県立美術館
	小村優太	哲学、靈魂論、知性論、イブン・シーナー	学振PD

区分	名前	専門	所属
2.院生委員会歴代委員（続）	近藤貴盛	共通詩学、フランス批評研究、ステファヌ・マラルメなどの象徴派詩	
	蔡暉映		比較・博士
	齋藤達也	フランス近代美術史、ジャポニズム、エルネスト・シェノー、エドガー・ドガ	比較・博士
	佐々木悠介	比較芸術（写真と文学、仏語圏と英語圏）	駿河台大学、法政大学ほか（非常勤）
	定村来人	比較文化、美術史、河鍋曉斎	比較・博士
	佐藤弥生	比較芸術、美術批評、歴史学、ポール・ドラロッシュ、中庸派	比較・修士
	丁相珉	比較文学、大江健三郎の小説における語り	比較・博士
	實谷総一郎	フランス近代文学、美術批評、エミール・ゾラ	比較・修士
	辛重官	比較文学、安部公房	比較・博士
	申ミンジョン	比較芸術、日韓文化交流史、韓国と日本の近代絵画	比較・博士
	須田彩香	フランス文学、比較文学、アルフォンス・ドーデ	比較・博士
	高瀬純平	倫理学、社会哲学、ユルゲン・ハーバーマス	埼玉県庁
	高橋祥子	比較日本研究、学問史、悉曇学、寂厳	科学研究員
	立花拓	比較文学、比較詩学、ヴィニシウス・ヂ・モラエス	
	丁熹貞		比較・博士
	手島崇裕	平安時代を中心とした対外関係史、仏教史	韓国慶熙大学校 助教授
	刀根直樹	比較日本研究、お雇い米国人教師、E. W. クラーク、中村正直	比較・修士
	永井久美子	クロス・ジャンル研究（絵画と文学）、比較日本文化論、絵巻物、後白河院文化圏	比較・助教
	中井真木	文化史（服装）、比較日本研究、服装制度、身分秩序、公家と武家	早稲田大
	中村真衣子	フランス近代美術史、ポール・セザンヌ、ピュヴィ・ド・シャヴァンヌ	比較・修士
	西田桐子	戦後日本語小説、人種表象、マイノリティー表象、黒人	比較・博士
	二村淳子	比較文化、美術史、東アジアの20世紀美術	比較・博士
	農頭美穂	フランス近代美術、装飾芸術、比較芸術、ピエール・ボナール、ナビ派	比較・修士
	信岡朝子	クロス・ジャンル研究（特にイメージ研究）、環境史、シートン、ディズニー、動物物語、自然写真、絵本、児童文学・文化	東洋大学 専任講師
	朴恩恵	日本近代文学、比較文学、谷崎潤一郎	比較・修士

区分	名前	専門	所属
2.院生委員会歴代委員（続）	林久美子	クロス・ジャンル研究（テキストとイメージ）、クロス・エリア研究、フェリックス・レガメー、日仏文化交渉史	比較文学比較芸術コース教務補佐、東洋大学非常勤講師
	林三博	視覚文化論、比較芸術、写真、対外対内プロパガンダ、日本像、博覧会	
	潘郁紅	クロス・ジャンル研究、手塚治虫、マンガ文化	中共中央党校
	韓程善	クロス・ジャンル研究（文学と映画）、江戸川乱歩	
	檜山智美	インド・中央アジア仏教美術史、比較文学・比較文化、東西文化交渉史、キジル石窟の仏教壁画	
	深見麻	日米関係史、近代日本画、新版画、在米日系移民	
	藤田千紘	日本近代美術史、比較芸術、書籍の装丁、装丁論	国立国会図書館
	古舘遼	近現代美術史、比較芸術、アート・マネジメント、アール・ブリュット、写真	比較・博士
	堀江秀史	比較芸術論、映像（写真・テレビ・映画）、寺山修司	比較・博士
	本間友佳	比較文学、翻訳論、江戸川乱歩	比較・修士
	前田佳子	比較芸術論（舞踊学、身体論）、クロスエリア研究、パリ舞踊	国際交流基金
	松枝佳奈	日露文化交渉史、ロシア文学・ロシア文化、大庭柯公、二葉亭四迷	比較・博士
	松尾梨沙	音楽学（楽曲分析）、ポーランド詩学、比較芸術、フレデリク・ショパン	比較・博士
	三上真理子	展示論、写真論、美術館学、オーストリア・ドイツ近現代美術	比較・博士
	宮坂奈由	フランス近代美術史、クロス・ジャンル研究（絵画と美術批評）、印象派絵画(カイユボット)、美術批評	
	安永麻里絵	フォルクヴァング美術館、カール・エルンスト・オストハウス、カール・ヴィート	比較・博士
	山崎はずむ	アメリカ文学、ノンフィクション、ナラトロジー	比較・博士
	吉岡知子	美術史、原田直次郎、19世紀後半のミュンヘン画壇	埼玉県立美術館
	吉岡悠平	哲学、ヒューム研究、現代メタ倫理学	比較・修士
	米田雄一		歴史民俗博物館
	ルチアナ・ドブレ		
3.今橋研究室アシスタント	坂田亜希子		今橋研究室アシスタント
	永尾知佳		今橋研究室元アシスタント／現在＝東京會館ブライダル部

3 駒場博物館関係記録

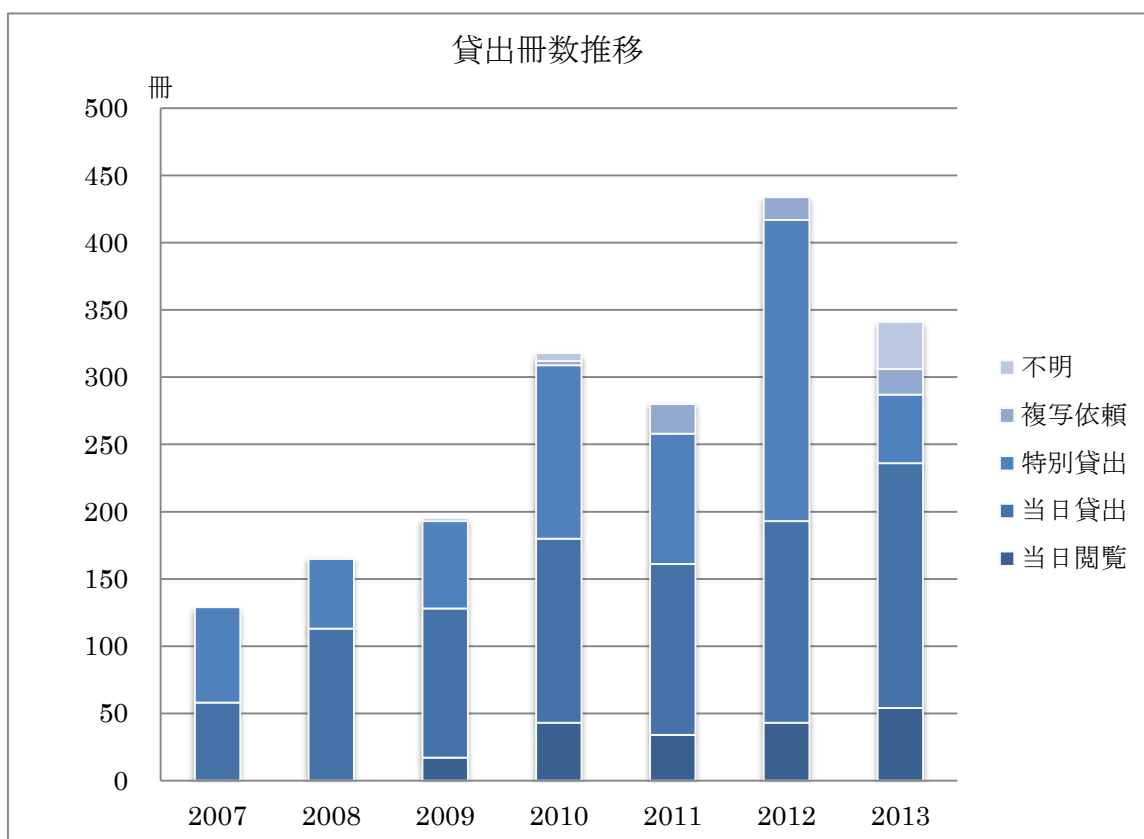
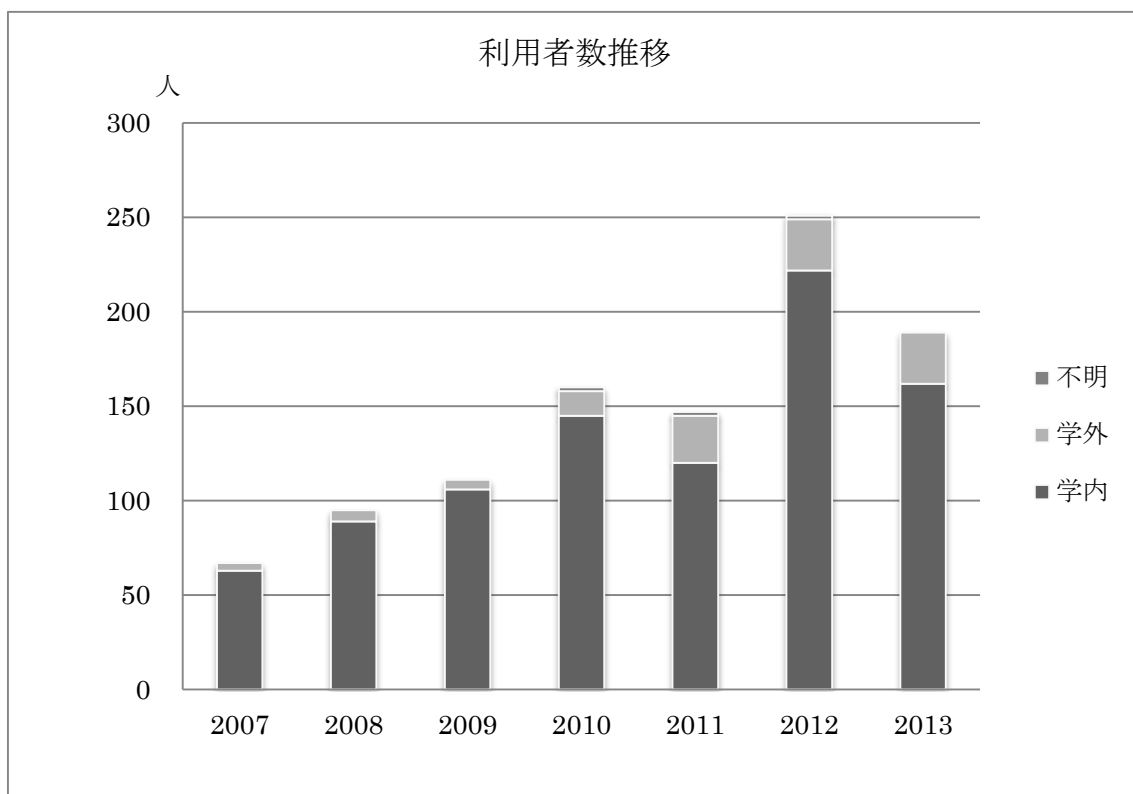


駒場博物館外観(美術博物館・自然科学博物館)

3.1 2006 年～2013 年までの資料室図書利用統計

利用者数統計、利用者数推移、貸出冊数推移に分かれている。

年度	利用者			利用者 合計	利用方法					利用図書 合計
	学内	学外	不明		当日閲覧	当日貸出	特別貸出	複写依頼	不明	
2007	63	4		67		58	71			129
2008	89	6	0	95	0	113	52	1	0	166
2009	106	5	0	111	17	111	65	2	0	195
2010	145	13	2	160	43	137	129	3	6	318
2011	120	25	2	147	34	127	97	22	1	281
2012	222	27	2	251	43	150	224	17	0	434
2013	162	27	0	189	54	182	51	19	35	341



3.2 年度別 OPAC 登録図書冊数（2014 年末日現在）

	冊数	カタログ冊数(内数)
洋書合計	816	326
1990	1	
1991	2	
1992	21	3
1995	45	3
1996	10	
1997	1	
2001	1	
2002	1	
2006	6	3
2007	31	10
2008	3	3
2009	17	10
2010	282	156
2011	130	74
2012	79	39
2013	186	25
和書合計	11,893	8,883
1991	23	
1992	9	
1993	20	
1995	24	7
1996	6	
1997	7	
1998	31	2
1999	9	1
2000	1	1
2001	13	9
2002	3	
2004	4	2
2005	301	298
2006	1,970	1,968
2007	1,587	1,490
2008	293	292
2009	1,280	1,013
2010	1,584	1,059
2011	1,766	881
2012	1,502	647
2013	1,460	1,213
総計	12,709	9,209
雑誌種類数	786	

3.3 資料室紹介記事

美術館図書室 SIG 通信

研究教育に直結した資料室として一駒場美術博物館および資料室見学記

安藤 智子

2009年6月25日、東大駒場美術博物館見学会に参加させていただいた。2004年の全面リニューアル直後の「色の音楽・手の幸福ーロラン・バルトのデッサン」展以来、5年ぶりにうかがった。正門を入ると正面に時計台のある1号館、そこを中心に左右対称に双子のような建物が、900番教室と右手の駒場美術博物館である。

はじめに今橋映子先生から、東大駒場美術博物館の成り立ちや変遷、さらに資料室オープンに至るまでの経緯についてお話しいただいた。その後、特任研究員の坪井久美子氏と共に資料室をご案内いただく。

こちらは、2007年6月に開室した展覧会カタログに特化した資料室であり、蔵書はすべて、東京大学オンライン蔵書目録(OPAC)並びにNACSIS Webcatで検索可能となっている。閲覧利用できるのは、東京大学に所属する教職員、院生、学生などに限られている。展覧会カタログの収蔵という点では、一昨年開館した国立新美術館資料室や東京都現代美術館図書室などの広範かつ大規模なものはいくつかあるが、あくまで研究教育に直結した学際的展覧会に重きをおいていることは、他と一線を画している。開催館ごとに整理、配架されており、決して広くないながらも充実した内容とわかりやすい配置となっている。

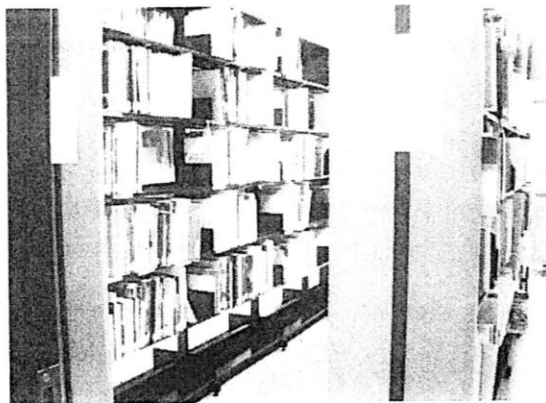
特筆すべき制度として、「展覧会・カタログ評院生委員会」がある。これは、2004年に比較文学比較文化研究室の在学生によって、若手研究者の執筆の機会を拡大するという目的で組織された。活動内容は、全国の美術館・博物館・文学館で開催される展覧会から比較文学比較文化研究と関わるような学際的企画展をピックアップし、その展覧会カタログと併せて批評するものである。評論は、『比較文学研究』編輯委員会の査読を経て、東大比較文学会発行の学術雑誌『比較文学研究』に掲載される。一連の活動のなかで、各館の企画展スケジュールの調査・集計には、駒場美術博物館資料室の協力は不可欠であり、また、委員会が推薦した展覧会や有力な候補にあがった展覧会のカタログは、資料室に納められることとなる。委員にとっては研究の一環としてのすばらしい経験となり、資料室にとっては多彩な専門分野を網羅した委員による蔵書充実となる、合理的なシステムでもあるといえる。さらに学術雑誌ともリンクし

ていて、よく練られた構造になっていると思った。

展覧会の選出検討の際は、年間スケジュールが早く確認できることが重要であり、例年企画スケジュール決定が遅れがちな美術館の館員としては、身の小さくなる話でもあった。

「展覧会・カタログ評院生委員会」の力作を見せていただいた後、折茂克哉氏が展示室をご案内くださった。開催していたのは、東京大学教養学部創立60周年記念「矢内原忠雄と教養学部」。旧制第一高校の図書館であったという由緒ある建物は、ドームを内包する簡素かつ清廉な設計で、静謐な空気を醸しだしており、天井の格子が美しい。所蔵品は旧制第一高校当時の教材、中南米・アジアの考古学資料、今回一部展示している南方の民俗資料、さらに近代日本画、現代美術など多岐にわたる。展示環境を整えるのも、作品の調査・保存をするのも、手作りの工夫が必要な様子。多少の差異はあれ、何処も同じような悩みを抱えていることを実感した。

今橋先生のお話からは、現在の研究に直結した機動力のある資料室を目指しているという強い思いが感じられた。美術館・博物館・図書室の活動では、限られたものの中で、出来ることを日々積み重ねることが重要であると同時に、内部・外部への積極的なアプローチも必要であり、そのことを再認識した見学会となった。



(あんど う ちえこ 出光美術館)

撮影：山崎美和

安藤智子「研究教育に直結した資料室として一駒場美術博物館および資料室見学記」『アートドキュメンテーション通信』No.83、アート・ドキュメンテーション研究会、2009年、10頁。

編集委員 (所属は本誌発行時)

◎西田 桐子	——編集とりまとめ	東京大学大学院総合文化研究科・博士課程
○岩瀬 慧	——編集とりまとめ	東京大学大学院総合文化研究科・博士課程 三菱一号館美術館・学芸員
古舘 遼		東京大学大学院総合文化研究科・博士課程
松枝 佳奈		東京大学大学院総合文化研究科・博士課程
岡野 宏	(校正)	東京大学大学院総合文化研究科・博士課程
山川 剛人	(校正)	東京大学大学院総合文化研究科・修士課程
李 範根	(表紙デザイン)	東京大学大学院総合文化研究科・修士課程

本誌執筆者・資料提供 (所属は執筆・提供時)

今橋 映子	東京大学大学院総合文化研究科・教授
寺田 寅彦	東京大学大学院総合文化研究科・准教授
坪井 久美子	(駒場博物館関係資料作成) 東京大学大学院総合文化研究科・教養学部駒場博物館
松枝 佳奈	東京大学大学院総合文化研究科・博士課程
岩瀬 慧	東京大学大学院総合文化研究科・博士課程
古舘 遼	東京大学大学院総合文化研究科・博士課程

展覧会・カタログ評院生委員会 10 周年誌

【発行日】

2015 年 3 月 31 日

【編集者】

展覧会・カタログ評院生委員会 10 周年誌編集担当

【発行】

展覧会・カタログ評院生委員会

(東大比較文學會)

住所 〒153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1

東京大学大学院比較文学比較文化研究室気付

☎ 03-5454-6390

<http://www.todai-hikaku.org/catalogue.php>

協力：

東京大学大学院総合文化研究科・教養学部駒場博物館

